

た方法がとられた。先生の小柄な体軀からどうしてあのようなファイトができるのかといったこともまた不思議であった。水泳とスキーで鍛えたためであろうか。われわれがフィールドワークに出かけた時には、中谷先生もしたように必ず数日間を一緒に過し、学生と起居を共にした。そしてカメラのフィルムの装填、暗室の使い方までも自分が手本を示されたのである。

昨年以来、体調を崩し入退院を繰り返していた。9月に再入院されてからは、病状は一進一退の繰り返してあった

が、しかし眼にみえて衰弱が進んでいった。それでも11月24日に放映された中谷先生をテーマとしたテレビのプログラムは喰い入るようにして観ておられたのが印象的であった。今頃は、中谷先生と一緒に低温室で人工雪を作っていた頃の昔話をしているのだろうか。それとも、最もホットな最近の雪の結晶の話題だろうか。いや、北陸の冬の雪の話をしているのだろうか。

ご冥福をお祈りする次第である。

(北大理学部 菊地勝弘)



H. Van Loon 編

「Climates of the Oceans」

Elsevier 社, 1984年刊, A 4版,
716 ページ, 250 グルデン

本書は、すでにこの欄で(32巻11号)紹介者が触れられている、World Survey of Climatology シリーズの最新刊(第15巻)である。

海洋の気候図については、Budyko の The Heat Balance of the Earth's surface (1956年刊、原著はロシア語)以来、地球全体をカバーしたものはみあたらない。それ以後の研究は主に北半球の、データが多く解析のしやすい、人口の多い地域の近海に集中している。

しかし近年、海洋の気象現象に対する重要性、とくに全地球的な気候変動に果たす役割が重要視されるにつれ、今まであまり解析されなかった赤道や南半球の海洋の変動にも目が向けられるようになった。そしてそれに伴い、そうした海洋上の気象現象を対象とする研究者も世界的に増加している。その場合、その海域の状況をざっと把握しておく必要があるのだが、これまでの文献は研究論文や単なるデータ集がほとんどであり、解説も少なく、そのような要求にはあまりこたえられない。本書はその点解説もていねいであり、手引きとしては適当であろうと思われる。

本文は7章に分かれ、前の6章はそれぞれ大西洋、太平洋、インド洋を南北にわけて、海域別に記述している。各章にはまず使用したデータと計算法の説明があり、次に海面での気象要素(風、波、気圧、気温、海面

温度、湿度、雲量等)と、熱フラックスの1,7月を中心とした図、主要な島での地上観測の各月ごとの表がつづく。また、それぞれの海域に特徴的な現象についてもトピック的に扱われ、多くのページがさかれている。このように本書の「気候」の中味は季節変動が主体であるが、経年変動についても、エル・ニーニョのように重要な現象については簡潔にのべられている。

編者は、本書の企画から3人目にあたるが、全地球的な研究結果の報告というよりは、各海域別の詳細な紹介を編集方針としているようである。著者の半数近くはいわゆる現業機関の人を選び、各海域に密着した記述を期待し、しかもかなり自由に書かせている。このため、各章の記述の形式が統一されていず、また計算はそれぞれ別のデータ・ソースや計算式を使って行われるため、編者自身も認めているように、隣接する海域で章ごとに図が整合していないなど、データ集としては欠点もある。そのかわり、海域ごとのトピックはそれぞれにユニークであり、各著者の得意とする面が発揮され、なかなかおもしろい。本書のもう一つの特徴としては、南半球にかなりの重点をおいており、ページ数も半分以上が赤道以南の海洋に対して費されていることがあげられる。

欠点をいえば、上に述べた理由から、どうしても大部で高価になってしまうことである。また英文で書かれているため、初学者にとってとっつきにくい面もある。やはり直接関係の深い研究者向けの本であるといえよう。したがって本書の特徴を一言でいえば、本書は海洋上の気象現象を研究するものにとって、海洋の「地誌」ともいべきものである。

(愛媛大学農学部 西川 敦)